



## 👁️👁️ みどころ

ナチスドイツによって強奪された美術品の返還を求める『ミケランジェロ・プロジェクト』（13年）と『黄金のアデーレ』（15年）は面白い映画だったが、ドキュメンタリーの本作は勉強になる映画。

「大ドイツ芸術展」vs「退廃芸術展」は興味深いし、グルリット事件にはビックリだ。また、美術品の強奪と保管、返還を巡って登場する多種多様な人物像もしっかり勉強したい。さらに、ヒトラー総統vsゲーリング元帥の美術品を巡る醜い強奪競争にも注目！

もっとも、ヒトラーはフランスのナポレオンや、植民地時代のイギリスの真似をただけ・・・？そう言えなくもない？ちなみに、ルーヴル美術館も大英博物館も「泥棒美術館」と呼ばれているそうだが・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■この分野のヒトラー映画にも注目！こりゃ必見！■□■

①ヒトラーが青年時代に画家を目指していたこと、②そのため、ウィーン美術アカデミーを受験したものの、2度も不合格になったこと、しかし、③貧乏時代には自分の絵画の能力を信じながら、絵葉書を描いて生活していたこと、は有名な事実だ。しかし、そんな生活に絶望したヒトラーが、見出した自分の第2の人生とは？そんな思いで、(現代に降臨してきた)若き日の“ヒトラーのそっくりさん”が演説に没頭する姿を描いたメチャ面白い映画が、『帰ってきたヒトラー』（15年）（『シネマ38』155頁）だった。

他方、私は現在、「一戦後74年を迎えて—ヒトラー映画、ホロコースト映画、ナチス裁判映画大全集」を企画中だが、その1節として『ナチスに奪われた金塊を奪還せよ！』と

いうテーマで、『黄金のアデーレ 名画の帰還』（15年）（『シネマ37』261頁）と『ミケランジェロ・プロジェクト』（13年）（『シネマ37』267頁）を収録予定。また、『ナチスによる贋札造りや絵の贋作は？』というテーマで、『ヒトラーの贋札（にせさつ）』（06年）（『シネマ18』26頁）と『ミケランジェロの暗号』（10年）（『シネマ27』123頁）を収録予定にしている。これらはそれぞれ「史実に基づく物語」としてメチャ面白い映画だった。

そんな私にとって、チラシで「ピカソ、ゴッホ、フェルメール、マティス、ムンク、モネ……今なお行方不明の名画たち。ナチスに弾圧され奪われた美術品と、それに関わる人々の運命とは？究極の美と権力に秘められた名画ミステリー。」と宣伝されている本作は必見！もっとも、本作はドキュメンタリーだから、ひょっとして、その面白さはイマイチ・・・？

## ■●●ヒトラーは古典派！退廃芸術は大キライ！■●●

中国の深圳の大芬には油絵村があり、そこには1万人を超える画工がおり、毎年数百万点の油絵が世界中に売られていることを、私は『世界で一番ゴッホを描いた男』（16年）を観てはじめて知り、「やっぱり中国は広い！そして面白い！」と書いた（『シネマ42』136頁）。また、私は2017年4月に徳島県の鳴門にある、世界初の陶板名画美術館として有名な大塚国際美術館を見学して、その規模の大きさにビックリしたが、そこではとりわけ、ピカソの「ゲルニカ」に感激した。

しかし、画家志望だった若き日のヒトラーの好みは知らないが、権力を握った後のヒトラーはゴッホもピカソも大嫌いだったらしい。その理由は、当時、世界的に評価されていた「印象派」の作品や、新たなアートとして出現していた「前衛的表現」を「コスモポリタンので共産主義的」と考え、「退廃芸術」と見なしたためだ。1933年に政権を掌握した後のヒトラーはアーリア人種の優越性を唱え、ユダヤ人を劣等民族として徹底的に抑圧し、地上からの民族抹殺を目指したが、そんなヒトラーにとっては、芸術もアーリア人による写実的で古典主義的な作品が好みだったらしい。

しかし、芸術についての好き嫌いは人それぞれ。そんなことに政治が権力的に介入するのが不当なことは、わかりきっていることだが・・・。

## ■●●美術品強奪競争（1）ナポレオンvsヒトラー■●●

ユダヤ人と同じように、フランス人もナチス・ヒトラーによる美術品の強奪を強く非難しているが、考えてみれば、かつてヨーロッパを制覇したフランスのナポレオンも、ヨーロッパ制覇の過程で各国、各地、各美術館から膨大な美術品を強奪したはず。そのため、フランスのルーヴル美術館は「泥棒美術館」と呼ばれている。また、植民地獲得競争のトップを走ったイギリスも、世界各国、各地から強奪した大量の美術品を船に乗せて大英博物館に運び込んで展示したのだから、大英博物館もルーヴル美術館と同じく「泥棒美術館」と呼ばれている。そう考えると、ヒトラーもそんなフランスやイギリスと同じことをした

だけかも・・・。

そんな美術品強奪競争におけるナポレオンv s ヒトラーについては、パンフレットの中にある中野京子氏のコラム「美術品を漁る」が面白いので、こりゃ必読！

## ■□■美術品強奪競争（2）ヒトラーv s ゲーリング■□■

ナチス政権の「ナンバー3」が「金髪の野獣」「ナチスの野獣」と呼ばれて恐れられたライnhalt・ハイドリヒであることは『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』（16年）（『シネマ40』190頁）や『ナチス第三の男』（17年）で明らかだ。すると、ナチスの「ナンバー2」は誰？それは、ハインリヒ・ヒムラー？ヨゼフ・ゲッペルス？それともヘルマン・ゲーリング？あるいは、アドルフ・アイヒマン？アイヒマンは、『否定と肯定』（16年）（『シネマ41』214頁）、『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマ32』215頁）、『アイヒマン・ショー 歴史を映した男たち』（15年）（『シネマ38』150頁）等の「アイヒマン裁判」で有名だが、所詮小物。

客観的には、ナチスドイツのナンバー2は、1939年にヒトラーの後継者に指名され、40年に国家元帥になったヘルマン・ゲーリングだ。1893年生まれの彼は、1889年生まれのヒトラーがつくったナチス党に1922年に入党して以来、ずっとヒトラーを支え続けたナンバー2。ところが、スターリングラード攻防戦の失敗で冷遇されてからの彼は、美術品の収集にのめり込み、ヒトラーとの間で美術品強奪競争を繰り広げることに。そして、やがてはヒトラーを欺いてルーベンスやクラナッハなどの名画を独占するようになったというから、ビックリだ。ドキュメンタリーである本作では、そんなナチストップのヒトラー総統とナンバー2のゲーリング国家元帥との間で、美術品強奪を巡る醜い競争が明示されるので、それに注目！

日本では今、東京と大阪でフェルメール展が開催され大人気を読んでいるが、ヒトラーとゲーリングとの間のフェルメール（の絵）を巡る競争は激しかったらしい。もちろん、ナンバー2のゲーリングとが総統であるヒトラーの機嫌を損ねることはできないが、そこで彼が使った策略とは・・・？

## ■□■大ドイツ芸術展v s 退廃芸術展■□■

本作はドキュメンタリー映画だから、面白さではイマイチだが、勉強に役立つことにおいては一級品。本作では、何よりもまず、大ドイツ芸術展と退廃芸術展に注目！

大ドイツ芸術展は、ヒトラー自らが企画し、1937年から44年まで毎年開催されたナチスのお墨付き展覧会で、ヒトラーとゲーリングが占領国の美術遺産を巡って競い合うことになる古典美術への執着の始まりになった、といわれている。そこでの女性の裸婦像には、「健康で美しい金髪の子供たちをたくさん産んで総統に捧げよ」のメッセージが込められていたそう。

他方、退廃芸術展は、ナチスがドイツ国内の公立美術館とユダヤ人収集家の自宅や画廊から没収した16000点の中から、ナチスによって広められた美の概念にそぐわないと見なされた650点が「退廃美術」の烙印を押され、さらし者として公開されたそう。ところが、入場無料だからか連日大盛況となり、動員数は4か月で200万人を記録。あまりの人気に1941年までドイツ13都市を巡回するほどだったそう。

もし、今日本でこの2つの芸術展が開催されたら、さてあなたはどちらへ・・・？

## ■□美術品を如何に強奪？秘匿？その全貌を本作で■□

本作には、ヒトラーの下で美術品の強奪部隊として仕えたローゼンベルク特捜隊（ERR特捜隊）と、そのボスであるアルフレート・ローゼンベルクが登場するので、それに注目！これは本作ではじめて知ることができた。また、生家がヒトラーが住む家の近所にあり、子供時代の遭遇経験を記した回顧録を2013年に出版したというエドガー・フォイヒトヴァンガーも本作ではじめて知ることができた。さらに、ユダヤ系ドイツ人で現代芸術を好んだために美術館長の職を2度失ったものの、審美眼を認めたゲッベルスの手先として退廃美術品の売買に関わったヒルデブラント・グルリットも、本作ではじめて知ることができた。

他方、東京への空襲が続いた太平洋戦争末期には、日本も皇居、大本営、その他の重要政府機関を長野県埴科郡松代町などの心中に掘った地下坑道跡に移転する計画が閣議決定されていたが、敗色濃くなったドイツでも、ヒトラーやゲーリングが各国から強奪した大量の美術品の保管、秘匿に苦労したのは当然。そこで、ヒトラーやゲーリングの命令を受けた悪徳画商たちは、オーストリアの山間部に掘った坑道内に大量の美術品を運び込み、秘匿したが、本作ではその全貌（？）が明らかにされるので、それに注目！

## ■□強奪された美術品を如何に回収？その全貌を本作で■□

逆に、ナチス・ドイツが隠した美術品を追う側である「モニュメンツ・メン（記念建造物・美術品・文書に関する調査部隊）」については、『ミケランジェロ・プロジェクト』ではじめて知ったが、それは本作にも登場するので、その実態に注目！また、『黄金のアデーレ 名画の帰還』では、クリムトの名画「黄金のアデーレ」の真の所有者として、その回収を目指すマリアの裁判が描かれたが、本作では、1910年にパリのラ・ボエシー通り21番地に開いた画廊から奪われた数々の美術品返還を最初に法廷で訴えた一族であるローゼンバール家が登場するので、それに注目。

さらに、1240点もの名品を略奪されたオランダ人画商のハウトスティッカー家や、さらにビスマルク皇帝も嫉妬するほどの名品を所有していたドイツ有数のドレスナー銀行を創立したドイツ系ユダヤ人のグッドマン家も登場するので、彼らにも注目！

## ■□■グルリット事件にビックリ！その全貌を本作で■□■

さらに、本作ではじめて知って大いに驚かされたのは、グルリット事件。これは、ヒトラー専任の美術商だったヒルデブランド・グルリットと家族が戦後もひた隠しにした絵画コレクション約1500点の存在が、2013年11月4日、ドイツの週刊誌「フォークス」にスクープされた事件のことだ。

2010年9月22日、スイス・チューリッヒ発ドイツ・ミュンヘン行きの電車内で行われたドイツ税関の打ち抜き検査で、9000ユーロの現金を所持していたグルリットが現金の出所を咎められた。そして、2012年2月28日、脱税を疑う税務署がミュンヘンにあるグルリットの自宅を調査したところ、ピカソ、ルノワール、マティスなど、絵画等1280点を発見したが、その価値はなんと10億ユーロ(当時)といわれているから、すごい。

なお、2014年5月6日にグルリットが81歳で死去した翌日、その全財産をスイスのベルン美術館へ寄贈する遺書が発表されたそうだが、その執行は・・・？

2019(平成31)年4月29日記